

## メッセーリアウトライン サムエル記第一17:1～58

### 「ダビデとゴリヤテ」

[1-3]「ペリシテ人は戦いのために軍隊を招集した。ユダのソコに集まり、ソコとアゼカの間にあるエフェス・ダミムに陣を敷いた。一方、サウルとイスラエル人は集まってエラの谷に陣を敷き、ペリシテ人に対する戦いの備えをした。ペリシテ人は向かい側の山の上に構え、イスラエル人は手前側の山の上に構えた。その間には谷があった」

「ユダのソコ」…ベツレヘムの南西約21キロメートルの地。「アゼカ」…ベツレヘムの西約25キロメートルの地。「エフェス・ダミム」はこの両地点の間にあった。

「エラの谷」…ヘブロン近くのユダの山地から北西に流れる谷。ペリシテ軍とイスラエル軍はこの谷をはさんで対峙した。

[4-7]「一人の代表戦士が、ペリシテ人の陣営から出て来た。その名はゴリヤテ。ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半。頭には青銅のかぶとをかぶり、鱗綴じのよろいを着けていた。胸当ての重さは青銅で五千シェケル。足には青銅のすね当てを着け、背には青銅の投げやりを負っていた。槍の柄は機織りの巻き棒のようであり、槍の穂先は鉄で、六百シェケルあった。盾持ちが彼の前を歩いていた」  
「代表戦士」…古代の戦いでは全軍が戦わず、代表者によって決着をつけることがあった。

「背の高さは六キュビト半」…一キュビトは約44センチメートルであるので、286センチメートルになる。「胸当ての重さは青銅で五千シェケル」…57キログラム。「槍の穂先は鉄で、六百シェケル」…6.84キログラム

彼はカナンの地に住んでいた巨人の生き残りであったかかもしれない。→民数記13:33-34、申命記3:11、9:2、ヨシュア11:21-22 ここから分かるようにゴリヤテはけた違いな大きさであり、全身は鎧でおおわれており、青銅の投げやりを持ち、その前には盾持ちが歩いていた。完璧な武装である。

[8-11]「ゴリヤテは突っ立って、イスラエル人の陣列に向かって叫んだ。『何のために、おまえらは出て来て、戦いの備えをするのか。おれはペリシテ人、おまえらはサウルの奴隷どもではないか。一人を選んで、おれのところによこせ。おれと戦っておれを殺せるなら、おれたちはおまえらの奴隷になる。だが、おれが勝ってそいつを殺したら、おまえらがおれたちの奴隷になって、おれたちに仕えるのだ。』そのペリシテ人は言った。『今日、この日、おれがイスラエルの陣を愚弄してやる。一人をよこせ。ひとつ勝負をしようではないか。』サウルと全イスラエルは、ペリシテ人のことばを聞き、気をくじかれて非常に恐れた」

ゴリヤテはイスラエルと一対一の対決を望んだ。もちろんイスラエルには誰も出て来るような者がいないと知っていたのであろう。かつてはアンモン人、アマレク人、そしてペリシテ人をも打ち破ったサウルもこの時は対戦しようとしなかった。この時、すでにサウルからは主の霊が去り、主からの悪い霊に悩まされていたので(→16:14~15)、彼はゴリヤテに勝てるとは思わなかったのであろう。

サウルの息子ヨナタンもやはり恐れがあったか。

[12-14]「さて、ダビデは、ユダのベツレヘム出身の、エッサイという名のエフラテ人の息子であった。エッサイには八人の息子がいた。この人はサウルの時代には、年をとって老人になっていた。エッサイの上の三人の息子たちは、サウルに従って戦いに出ていた。戦いに行っていた三人の息子の名は、長男エリアブ、次男アビナダブ、三男シャンマであった。ダビデは末っ子で、上の三人がサウルに従って出ていたのである」

「エフラテ」はベツレヘムの古名。エッサイの上の三人の息子たちの従軍は自ら進んでか、あるいは父エッサイの勧めであるかは不明。あるいはサウルによる徴兵か。  
→8:11

[15]「ダビデは、サウルのところへ行ったり、帰ったりしていた。ベツレヘムの父の羊を世話するためであった」

ダビデは主からの悪い霊がサウルを悩ませている時に、豎琴を弾き、回復させるためにサウルのもとへ行き、また道具持ちとしても使えていたが、父の羊の群れの世話もしなければならなかったので、サウルのところに行ったり、父の家へ帰ったりしていた。

[16]「例のペリシテ人は、四十日間、朝早くと夕暮れに出て来て立ち構えた」

これはイスラエルにとっては屈辱の時であったであろう。誰もゴリヤテと戦えず、イスラエルを侮辱するゴリヤテのことばを聞かなければならなかったからである。

[17-19]「エッサイは息子ダビデに言った。『さあ、兄さんたちのために、この炒り麦一エパと、このパン十個を取り、兄さんたちの陣営に急いで持って行きなさい。この十個のチーズは千人隊長の長に届け、兄さんたちの安否を確認しなさい。そして、しるしを持って来なさい。サウルと兄さんたち、それにイスラエルの人はみな、エラの谷で戦っているから。』」

「炒り麦」…実が熟す前に刈り取った生麦を鍋で炒った、旅人や兵士用の食料。一エパは23リットル。「パン十個」…パン種を入れないせんべいのようなものであったか。→出12章

チーズ十個は千人隊長に届け、兄たちの安否を問う。エッサイの家は裕福ではなく、差し入れも質素なものであった。

[20-24]「ダビデは翌朝早く、羊を番人に預け、エッサイが命じたとおりに、言われた物を持って出かけた。彼が野営地に来ると、軍勢はと時の声をあげて陣地に向

かうところであった。イスラエル人とペリシテ人は、向かい合って陣を敷いていた。ダビデは、父からことづかった物を武器を守る者に預け、陣地に走って来て、兄たちに安否を尋ねた。ダビデが彼らと話していると、なんと、そのとき、あの代表戦士が、ペリシテ人の陣地から上って来た。ガテ出身のゴリヤテという名のペリシテ人であった。彼は前と同じことを語った。ダビデはこれを聞いた。イスラエルの人はみな、この男を見たとき、彼の前から逃げ、非常に恐れた」

ダビデはゴリヤテと初対面であったが、ゴリヤテは全く目にも留めなかったであろう。ゴリヤテが出て来ると、イスラエル人はみな、非常に恐れて、逃げ惑うのであった。

[25-27]「イスラエルの人々は言った。『この上って来た男を見たか。イスラエルをそしめるために上って来たのだ。あれを討ち取る者がいれば、王はその人を大いに富ませ、その人に自分の娘を与え、その父の家にイスラエルでは何も義務を負わせないそうだ。』ダビデは、そばに立っている人たちに言った。『このペリシテ人を討ち取って、イスラエルの恥辱を取り除く者には、どうされるのですか。この無割礼のペリシテ人は何なのですか。生ける神の陣をそしるとは。』兵たちは、先のことばのように、彼を討ち取った者には、これこれをされる、と言った」

ダビデはゴリヤテが出て来ても恐れたり、逃げたりしなかった。逆に、生ける神の陣をそしる無割礼のペリシテ人と呼んで怒りに燃える。ダビデはゴリヤテを討ち取った者には王はどうされるのかと問い、兵たちは最初に互いに話し合ったように、王が最良の報いを与えられることをダビデにも告げた。ペリシテの代表戦士であり、イスラエルを侮辱していたゴリヤテを倒すことは、イスラエルに加えられていた恥辱を取り除くことを意味する。

[28-30]「兄のエリアブは、ダビデが人々と話しているのを聞いた。エリアブはダビデに怒りを燃やして言った。『いったい、あまえは、なぜやって来たのか。荒野にいるあのわずかな羊を、だれに預けて来たのか。私には、おまえのうぬぼれと心にある悪が分かっている。戦いを見にやって来たのではないか。』ダビデは言った。『私が今、何をしたというのですか。一言、話ただけではありませんか。』ダビデは兄から別の人の方に向き直り、同じことを尋ねた。すると、兵たちは先ほどと同じ返事をした」

ダビデにとっては差しさわりのない質問をただけと思ったのであろうが、兄のエリアブは戦いを見にやって来たのだらうと決めつける。また王サウルのために王室に出入りするダビデに対するねたみもあったのではないか。

[31-33]「ダビデが言ったことは人々の耳に入り、サウルに告げられた。それで、サウルはダビデを呼び寄せた。ダビデはサウルに言った。『あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います。』サウルはダビデに言った。『おまえは、あのペリシテ人のところへ行って、あれと戦うこと

はできない。おまえはまだ若いし、あれは若いときから戦士だったのだから。』

サウルに呼び寄せられたダビデは自分が行ってゴリヤテと戦うと言う。しかし、サウルは「おまえは…あれと戦うことはできない」と即座に否定する。ゴリヤテは若いときからの戦士、ダビデは戦いの経験もない羊飼いの若者。勝負は火を見るより明らかである。

[34-36] サウルのこのことばに、ダビデは、自分は父の群れを飼っていて、獅子や熊が来て、羊を取って行くと、それを追い、打ち殺して羊を救い出しました。それでこの無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょうと言う。彼がここまでゴリヤテとの戦いを望むのは、ゴリヤテが「生ける神の陣をそしった」という宗教的な憤りからであった。

[37]「そして、ダビデは言った。『獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。』サウルはダビデに言った。『行きなさい。主がおまえとともにいてくださるように。』」

ダビデの確信は、自分を獅子や熊の爪から救い出してくださった主がゴリヤテの手からも自分を救い出してくださるという主なる神に対する信仰から出ていることが分かる。それに根差した彼の勇気と力と宗教的熱情が彼のことばのはしばしにあふれている。彼は自分が負けるとは少しも思っていない。そこまで聞いて、サウルはダビデにゴリヤテとの戦いに行くことを許す。「行きなさい。主がおまえとともにいてくださるように」。

[38-40] サウルはダビデに自分のよろいかぶとを着けさせ、剣を帯びさせたが、それらに慣れてい

なかったダビデはそのままでは歩くこともできなかった。それで彼はそれらを脱いで、いつものように羊飼いの自分の杖を手に取り、川から五つの滑らかな石を選んで、それを投石袋に入れ、石投げを手にして、ゴリヤテに近づいて行った。「石投げ」…革製のひもできており、それを二つに折ってその折った部分に石をはさみ、両端の部分を片手に持ち、ぐるぐると回転させ、遠心力で的を目指して石を飛ばした。

[41-44] ダビデの方に進んで来たゴリヤテはダビデに目を留めた。彼はまだほんの少年に見えたので、彼を蔑んで言った。「俺は犬か。杖を持って向かって来るとは」そして自分の神々によってダビデを呪った。「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう」状況は圧倒的にダビデにとって不利に見える。ペリシテ人の神々とはバルやアシュタロテ、ダゴンなどの偶像の神々。

[45]「ダビデはペリシテ人に言った。『おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう』」

ゴリヤテは武力においてははるかに勝っていたが、ダビデはイスラエルの神、万

軍の主の御名によって戦うことを宣言する。

[46-47]『今日、主はおまえを私の手に渡される。私はお前を殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、主が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは主の戦いだ。主は、おまえをわれわれの手に渡される。』

この戦いは互いの神の名にかけた戦いであり、ダビデにとっては彼個人の戦いではなく、主の戦いであった。

[48-51] ゴリヤテはダビデの方に近づき、ダビデもすばやく戦場を走って行き、ゴリヤテに立ち向かった。ダビデは手を袋の中に入れて、石を一つ取り、石投げでそれを放って、ゴリヤテの額を撃った。すると、石は額に食い込み、彼はうつぶせに地面に倒れた。ゴリヤテが唯一武装していないのが彼の顔面であった。そしてダビデは狙いを外さず正確にゴリヤテの額に石を命中させた。彼は倒れたが、この時点ではまだ死んではいなかった。そしてダビデは走って行って、ゴリヤテの剣を奪い、それでとどめを刺して首をはねた。彼は自分の剣は持っていなかったが、石投げと石一つでゴリヤテに勝ったのである。それで、ペリシテ人たちは、自分たちの勇士が死んだのを見て逃げた。

[52-53] これを見て、イスラエルとユダの人々はペリシテ人をガテとエクロンに至るまで追撃し、多くの者を刺し殺し、ペリシテ人の陣営を略奪した。

[54]「ダビデは、あのペリシテ人の首を取ってエルサレムに持ち帰った。しかし、武器は自分の天幕に置いた」

当時のエルサレムはまだヨシュア以来のカナンの地の占領が終了しておらず、エブス人が住んでおり、山麓にはイスラエル人が住んでいたようである。そこにダビデは簡単な住まいを用意していたのであろう。サウルの住むベニヤミンのギブアには父の家のあるベツレヘムよりもエルサレムから通うほうが近い。後にダビデがゴリヤテから奪った武器はノブに送られた。ノブはギブアとエルサレムの間にあり、ここに聖所があり、祭司アヒメレク(アヒヤ)が仕えていた。→21:1, 9, 22:9

[55-58]「サウルは、ダビデがああペリシテ人に向かって出て行くのを見たとき、軍の長アブネルに言った。『アブネル、あの若者は誰の息子か。』アブネルは言った。『王様、お誓いしますが、私は存じません。』王は命じた。『あなたは、あの少年がだれの息子かを調べなさい。』ダビデがペリシテ人を討ち取って帰って来たとき、アブネルは彼をサウルの前に連れて来た。ダビデはペリシテ人の首を手にしていた。サウルは言った。『若者よ、おまえはだれの息子か。』ダビデは言った。『あなたのしもべ、ベツレヘム人エッサイの息子です。』

サウルはダビデの名はすでに知っていたであろうが、ゴリヤテを討ち取った者に対する17:25節の約束を果たすために、彼の父の名を知る必要があった。サウル

から問われたアブネルも「存じません」と言い、そのためサウルから調べることを命じられた。

ダビデはサウルの道具持ちとなっていたが(16:21)、それも通いで仕えるという状況であり、王の道具持ちはダビデ以外にも何人もおり、サウルが主からの悪い霊に悩まされて精神錯乱状態に陥った時に、ダビデが呼ばれて、豎琴をもって奉仕したので、彼のことを詳しく知らなかったとしても不思議ではない。

今日の箇所はダビデが巨人ゴリヤテに勝利したという単なる武勇伝ではない。イスラエルは先祖アブラハム以来の天地の創造主である真の神を信じ、守られ、導かれている神の民であり、その神の民をそしるペリシテ人ゴリヤテのことばにダビデは憤りを覚え、主なる神のために戦い、勝利しようとしたのである。彼は「私は、おまえがそしったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。……この戦いは主の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される」(45~47)との信仰による確信を持っていた。そして確かに主はダビデを通してそのように勝利をイスラエルに与えてくださった。

主の霊の去ったサウルと、主の霊が下ったダビデの姿は対照的である。(16:13~14)そして、このペリシテ人との戦いでゴリヤテを倒した事実こそ、ダビデがサウルにとって代わるべき王であることを暗示するものである。そしてこのダビデの子孫からやがて私たちの罪を贖う真の救い主イエス・キリストがこの世に来られるのである。  
→マタイ1章